

佳作

那覇の町に生まれて

浦崎 敏子

平成二六年九月二一日、「三越」が閉店した。

那覇で生まれ育った者にとって、「三越」はかけがえのない存在だった。私の青春の思い出がまた一つ消えてしまった。高校二年の頃、昭和三二年、「大越百貨店」が「三越百貨店」に名称替えした。

青春真ただ中にあつた私たちは、休日には友人二、三名で、まず国映館で映画を観て、向かい側の山形屋でウィンドーショッピングを楽しんだ。

国際通りをブラブラしていると、必ず誰かと出会い、立ち話をして三越まで行き、またウインドーショッピングを楽しんだ。

それから平和通りへと向かう。三越側から向かって右側には、沖縄で一番古い「門」という喫茶店があり、左側には米軍のPXから流れた化粧品等売っている店が並んでいた。近くには「安木屋」の本屋があつて、そこで立ち読みをした。隣には「クール」というパーラーのような店があり、たまにソフトクリームを食べるのが唯一の贅沢だった。

時間をかけて歩き、お金は使わず街を散策して楽しんだ。国際通りは観光客も少なく、まさに、「わが街」という感じだった。

三越の閉店は寂しい。時代の波に乗れず、閉店に追い込まれた。私の青春の思い出の店もみんな無くなってしまった。

時代は変わり、市場も変わった。

思い出をたどり、三越前から平和通りへと歩みを進めた。急に終戦直後

の市場の様子や子供の頃のことを甦ってきた。開南から平和通りを縦軸に、神里原から浮島通りを横軸にして、中央に公設市場があり、一番の繁華街だった。神里原通りには大洋劇場や最初の山形屋が木造二階建てであった。ガーブ川沿いの新天地市場や水上店舗には、古着や米軍の払い下げ物資が並び、人々で混雑していた。今の東南アジアの市場のように、活気に満ち溢れていた。

現在の開南バス停の近くには、旧盆になると市いちがたった。地方から馬車で野菜やサトウキビなどの農作物を載せて来て、サトウキビを立てて、おじさんが「マーサイビンドー（おいしいよ）」と大声で呼び込みをしていた。すぐ側には馬車の人待ち顔に佇んでいる。近くには、一間ほどの狭い所で、ブリキを利用して日用雑貨を造っている人もおれば、下駄屋もある。ちよつとした空き地があると、勝手に家や小店マチヤグッが何の規制もなく建てられた時代であった。

地方から野菜やサトウキビなどを載せてきた荷馬車は、人が集まると客馬車に変わり、ポックリポックリと蹄の音をたてていく。皆、貧乏だったが生きるのに一生懸命だった。子供も労働にかりだされた。我が家も農業をしていたので、家で採れた野菜を、平和通りで立ち売りしたことがある。警察官が来るとパツと身を隠し、かくれんぼみたいでスリルがあつて面白かつた。

小学五年の夏休み、友達に誘われ三人でアイスクーキを売りに行った。古毛布一枚を持って付いて行った。閉店になった三越の場所に、「当たり屋」アイスクーキ屋があつた。その店から二本五円（B円）で受け取り、一本五円で、斜め向かいのバスセンターで、

「アイスクーキ、アイスクーキ買いませんか」とバスに乗っている人に大声で呼び掛けた。小さくてよく動き回り、愛嬌があるので、私のものが一番売れた。昼食も摂らず、溶けたアイスクーキの汁を啜って飢えをしのい

だ。

その稼ぎで一日目は平和通りの安木屋で、画板と絵具を買った。二日目は開南で母に下駄を買い、旧盆用にサトウキビ一束を求めた。

荷馬車の後ろに、見つからないようにそっとキビを載せ、身をかがめて私たちも乗った。ところが途中で主に見つかり降ろされた。家まで友達と交代で担いで帰った。三日目に先生に見つかり、すぐ止めるように指導されて素直に止めた。先生は、そんなことを続けたら不良になる、とおっしゃった。三人の中の一人は不登校になってしまった。

今の開南は行くたびに空き店舗が目立ち寂しい。活気があるのは国際通りと公設市場で、開南辺りまで足をのばす人は少ない。

市場で商売マチグワをしているおじさん、おばさんの中には、無愛想だが顔馴染みになると、十円安くしたり、「ハイ、シーブン（はい、おまけ）」と言って野菜や惣菜などをくれる人もいる。手渡しでお釣りを受け取る時、ザラ

ザラした指先から、人の温もりと生活の厳しさを感じる。お互い生活するのは大変なのだ、と凹んでいた気分が、「よし、頑張ろう」という気持ちになれた。

時代の流れとは言え、三越も閉店になった。那覇の市場は活気を取り戻せないものか。そんなことを考えながら歩いていると開南のバス停留所に着いた。空を見上げると、青空に鳳凰木が陽の光を浴び、燦燦と輝いている。市場マチゲワの未来を象徴するようで嬉しくなった。